

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

令和6年度（2024年度）発生予報第1号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和6年度（2024年度）病害虫発生予報第1号（4月予報）

I 気象予報：令和6年（2024年）3月21日福岡管区気象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	20	70
	降水量	10	30	60
	日照時間	50	30	20

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
麦	赤かび病	やや多	やや多	—	—	気温高(+) 降水多(+)	
茶	カンザワ ハダニ	やや少	やや少	やや少(-)	並(±)	気温高(+) 降水多(-)	茶業研究所 平年比やや少 (-)
カンキツ	ミカンハダニ	やや多	やや多	やや多(+)	並～やや少 (±)	気温高(+) 降水多(-)	
ナシ	黒星病	やや多	並	—	—	降水多(+)	巡回調査(R5) 平年比やや少 (-)
冬春トマト	灰色かび病	やや多	並	並(±)	並(±)	降水多(+)	
	黄化葉巻病	やや多	やや多	黄化葉巻病 並(±) コナジラミ 並(±)	やや多～ 並(+)	(コナジラミ) 気温高(+)	



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春ナス	灰色かび病	多	並	多(+)	やや多～ やや少(±)	降水多(+)	
	すすかび病	やや多	多	やや多(+)	並(±)	降水多(+)	
冬春キュウリ	べと病	多	多	多(+)	やや多(+)	降水多(+)	
ウリ科野菜	退緑黄化病 ※スイカ 退緑えそ病	並	並	退緑黄化病 並(±) コナジラミ 並(±)	キュウリ やや多 メロン, スイカ 並(±)	(コナジラミ) 気温高(+)	
イチゴ	ハダニ類	多	多	多(+)	やや多～並 (±)	気温高(+)	
	アザミウマ類	やや少	少	やや少(-)	やや多～並 (±)	気温高(+)	
冬春果菜類	灰色かび病 (冬春ナス、冬 春トマトを除 く)	並	並	キュウリ イチゴ 並(±)	キュウリ 並 イチゴ やや多～並 (±)	降水多(+)	
	タバコ コナジラミ	並	並	トマト, ナス, キュウリ 並(±)	ナス 並～やや少 トマト, キュウリ やや多 メロン, スイカ 並(±)	気温高(+)	
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	並	並	ナス 並 キュウリ やや少(±)	ナス, スイカ やや多～並 キュウリ 並 (±)	気温高(+)	
野菜全般	アブラムシ類	並	並	トマト, ナス, キュウリ 並 イチゴ やや多(±)	ナス, トマト, キュウリ, メロン, バレイショ 並 スイカ, イチゴ やや多～並 (±)	気温高(+)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

2 予想発生量、根拠、対策等

◎麦類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 今年は暖冬の影響で麦の生育が早い。3月23日、24日に開花期をむかえていた作型では感染好適条件が認められており、多発する可能性がある(+)。

イ 気象予報では、向こう1ヶ月の気温は平年より高く、降水量は平年より多い予想である(+)。

(3) 対策

ア 赤かび病の主な感染時期は、大麦は蒴殻抽出期(穂揃い10日後)、小麦は開花期(出穂7~10日後)である。

イ 防除適期は、大麦は穂揃い期10日後頃(出穂期12~14日後)とその7~10日後。小麦は開花始~開花最盛期(出穂期7~10日後)とその7~10日後。

ウ 防除薬剤の効果は予防が主体であるため、適期に2回の防除を行う。

エ 麦類の出穂期や開花期等は気温に左右されるため、今後の生育状況に注意する。

(参考) 麦作況生育調査における出穂期

(合志市：農産園芸研究所作物研究室 3/25 現在)

麦種	品種	本年	前年	平年	平年比
大麦	はるしづく	3月23日	3月25日	3月26日	3日早い
小麦	シロガネ コムギ	3月23日	3月31日	3月31日	8日早い

※ 赤かび病多発条件出現日の判定結果は病虫害防除所ホームページ(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>)に掲載し、随時更新します。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎茶

1) カンザワハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、寄生葉率1.0%（平年3.6%）と平年比やや少の発生であった（－）。

イ 茶業研究所（御船町）の調査では、3月第4半旬の寄生葉率は5.0%（平年10.0%）と平年比やや少の発生であった（－）。

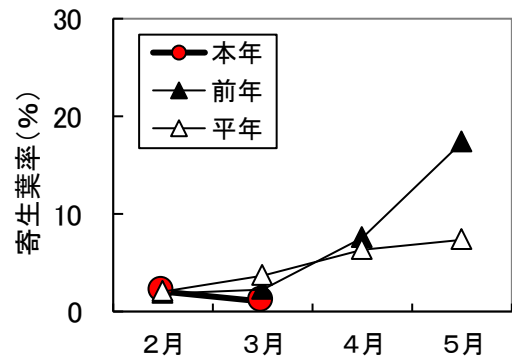
(3) 対策

ア 茶園をよく観察し、発生が目立つ場合は防除を行う。特に被覆栽培を行う場合は、新芽の被害が発生しやすいため、被覆前に発生状況をよく観察し、防除を行う。

イ 一番茶摘採期を考慮し、使用前日数等を確認した上で薬剤を選定する。

ウ 薬剤散布の際には、すそ部及び樹冠内部の葉裏にもムラなく薬剤が行き渡るように十分な量（400L/10a）を散布する。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 晩霜害を受けると、摘採時期の遅延等により本虫の被害が助長されるため、早めに対策を行う。



カンザワハダニ寄生葉率の推移

◎カンキツ

1) ミカンハダニ

(1) 発生量：やや多

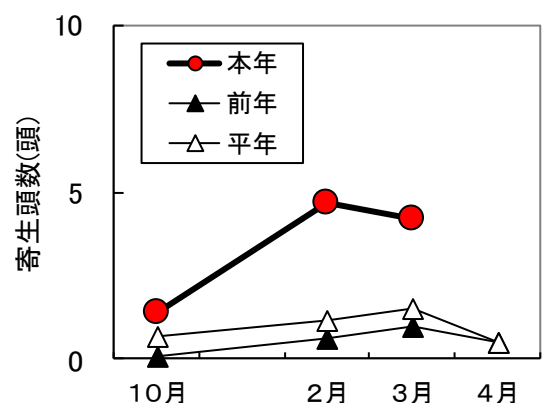
(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、寄生葉率 6.3%（平年 4.5%）、寄生頭数は 4.2 頭/10 葉（平年 1.5 頭/10 葉）と平年比やや多の発生であった（＋）。

(3) 対策

ア 越冬期にマシン油乳剤を散布しなかった場合は、ミカンハダニの発生に注意し、4月以降の薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



ミカンハダニの寄生頭数の推移



◎ナシ

1) 黒星病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

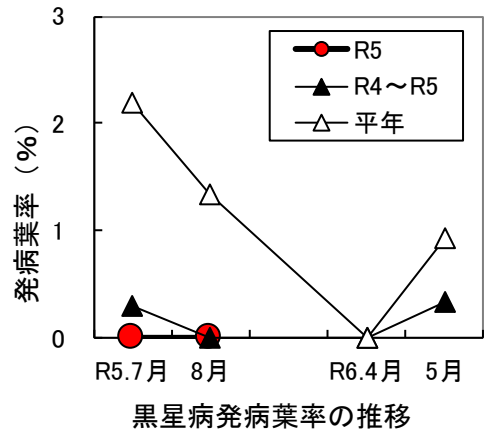
ア 黒星病は、前年の発生が多い場合、翌春の発生も多い傾向がある。R5年の巡回調査では、平年比少の発生であった(－)。

イ 開花期に降雨が多いと、その後多発しやすくなる。気象予報によると、向こう1ヶ月の降水量は平年より多い予想である(+)。

(3) 対策

ア 開花初期～落弁期の予防防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。また、薬剤の年間使用回数はQoI系、DMI系及びSDHI系がそれぞれの系統で2回、イプフルフェノキン剤は1回を基本とする。



(参考)

ナシの開花期 (宇城市：果樹研究所)

品種名	開花始め	開花終り
(トンネル) 幸水	3月28日	4月5日
新高	3月26日	4月4日
あきづき	3月31日	4月8日
幸水	4月2日	4月10日
秋麗	4月4日	4月12日

H25～R4までの平均値

◎冬春トマト

1) 灰色かび病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

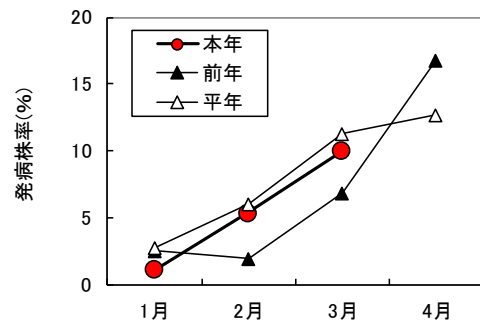
ア 3月の巡回調査では、茎葉での発病株率は10.0% (平年11.4%)、果実での発病株率は2.3% (平年1.7%)と平年並の発生であった(±)。

(3) 対策

ア 発病果、発病葉、花弁は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

ウ 多発してからの防除は困難となるため、発生初期の防除を徹底する(詳細は、3防除のポイント等の「施設野菜における地上部病害対策」を参照)。



灰色かび病の発病株率(茎葉)の推移 (冬春トマト)



2) 黄化葉巻病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、発病株率1.6%（平年1.5%）と、平年並の発生であった（±）。

イ 3月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率は0.9%（平年0.5%）と、平年並の発生であった（±）。

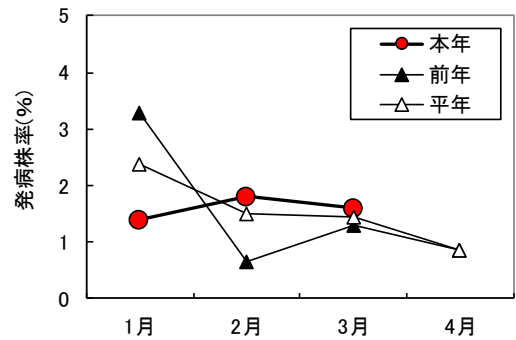
ウ 防除員報告では黄化葉巻病の発生が3地域中2地域で平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア タバココナジラミを施設内で「増やさない」対策及び保毒虫を施設外に「出さない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ 施設内外の雑草はタバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着板トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



黄化葉巻病の発病株率の推移
(冬春トマト)

◎冬春ナス

1) 灰色かび病

(1) 発生量：多

(2) 根拠

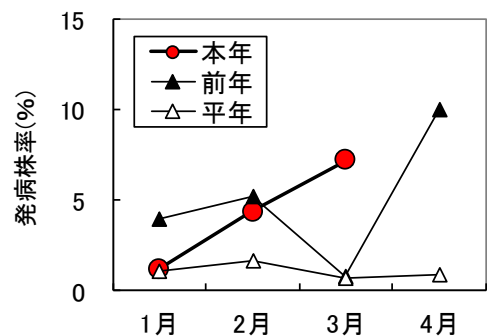
ア 3月の巡回調査では、発病株率7.2%（平年0.7%）と、平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

ウ 多発してからの防除は困難となるため、発生初期の防除を徹底する（詳細は、3 防除のポイント等の「**施設野菜における地上部病害対策**」を参照）。



灰色かび病の発病株率の推移
(冬春ナス)



2) すずかび病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、発病株率48.0%（平年36.2%）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策

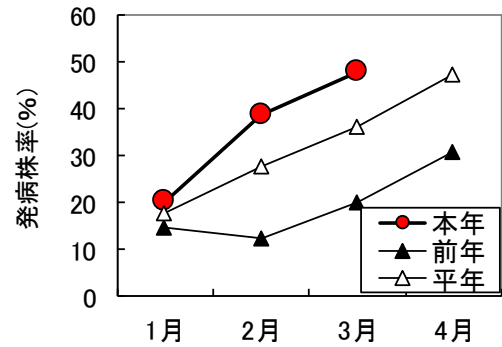
ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ 発病葉や施設資材上に付着した病原菌が次作の伝染源となるため、発生が多い場合は、栽培終了後に太陽熱消毒を行い、病原菌密度を低下させる。

エ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



すずかび病の発病株率の推移
(冬春ナス)

◎キュウリ

1) ベと病

(1) 発生量：多

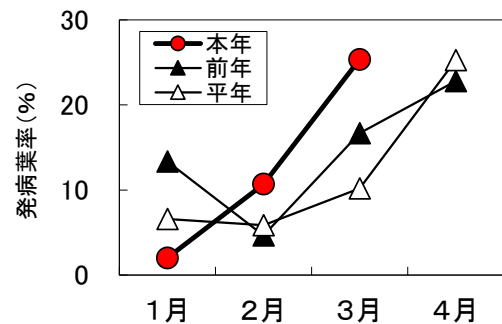
(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、一部ほ場で多発し、発病株率25.3%（平年10.2%）と平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、過湿を避け、肥培管理に注意する。

イ 多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する（詳細は、3 防除のポイント等の「施設野菜における地上部病害対策」を参照）。



べと病の発病株率の推移
(冬春キュウリ)



◎ウリ科野菜

1) キュウリ退緑黄化病、メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病

(1) 発生量：並

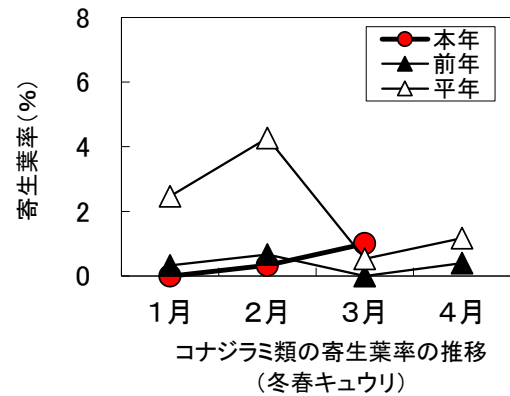
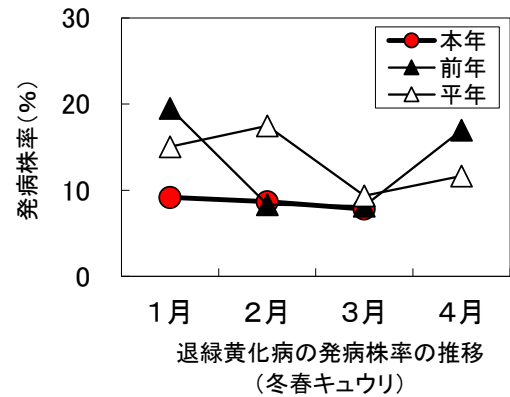
(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、キュウリにおいて、発病株率7.8%（平年9.4%）と平年並の発生であった（±）。

イ 同月の巡回調査において、キュウリのタバココナジラミの寄生葉率1.0%（平年0.5%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 保毒虫を施設内で「増やさない」対策および「出さない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。



◎イチゴ

1) ハダニ類

(1) 発生量：多

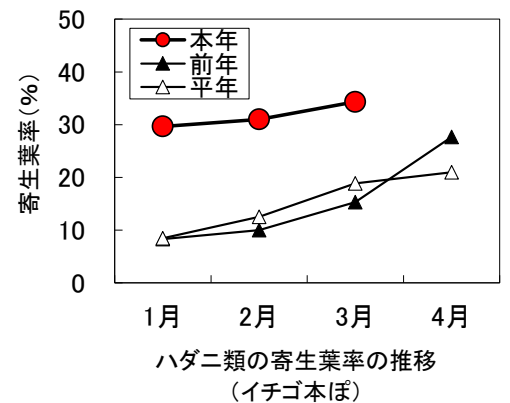
(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、寄生葉率34.3%（平年18.9%）と平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 現在発生が少ないほ場でも、気温が上昇すると、急激に増加するため、発生初期に防除を徹底する（詳細は、令和6年1月30日付け発生予察注意報第2号（<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/239601.pdf>）を参照）。

イ 次作で多発させないために、親株に持ち込まない対策を行う（詳細は、3 防除のポイント等の「イチゴ親株におけるハダニ類の防除対策」を参照）



2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、寄生株率11.3%（平年21.8%）と平年比やや少の発生であった（一）。

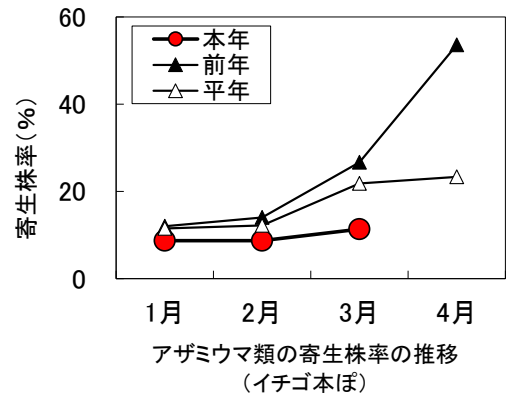
(3) 対策

ア 今後、気温の上昇に伴い、施設内での発生が増加するとともに、施設外からの飛び込みも多くなるため、花を注意深く観察することで早期に発見し、発生初期からの防除を徹底する。

イ 施設内外の雑草は、重要な発生源となるため、開花する前に除草する。

ウ 薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫（ミツバチ等）への影響を考慮し、薬剤を選定する。ただし、成虫の発生が多い場合は、アザミウマ類の防除を優先し、アザミウマ類成虫に効果の高い薬剤を選択する。その場合、天敵にも大きく影響するため、散布後のハダニ類の増加に注意する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春果菜類

1) 灰色かび病（冬春ナス、冬春トマトを除く）

(1) 発生量：並

(2) 根拠

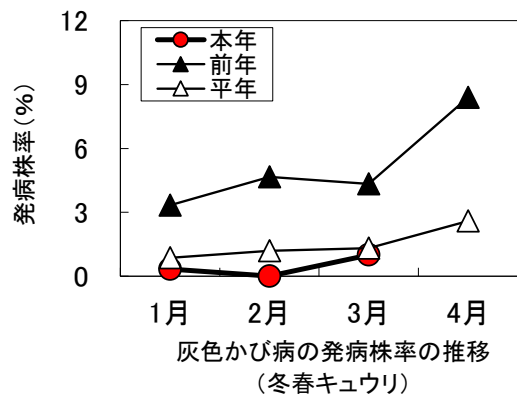
ア 3月の巡回調査では、キュウリで発病株率1.0%（平年1.3%）と平年並、イチゴで発病株は確認されず（発病株率平年0.1%）平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

ウ 多発してからの防除は困難となるため、発生初期の防除を徹底する（詳細は、3 防除のポイント等の「施設野菜における地上部病害対策」を参照）。



2) タバココナジラミ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、トマトで寄生葉率0.9%（平年0.5%）と平年並、ナスで寄生葉率7.6%（平年6.2%）と平年並、キュウリで寄生葉率1.0%（平年0.5%）と平年並の発生であった（±）。

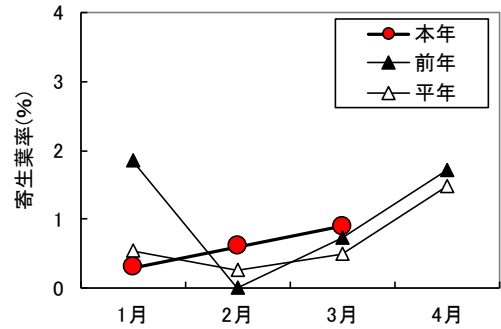
(3) 対策

ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

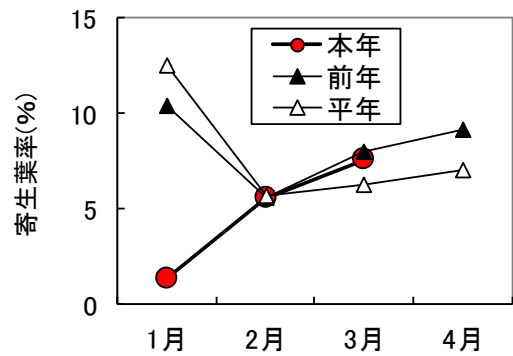
イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



コナジラミ類の寄生葉率の推移
(冬春トマト)



コナジラミ類の寄生葉率の推移
(冬春ナス)



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

3) アザミウマ類 (イチゴ除く)

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、ナスで寄生葉率0.4% (平年0.2%)と平年並、キュウリで寄生葉率0.3% (平年1.8%)と平年比やや少の発生であった(±)。

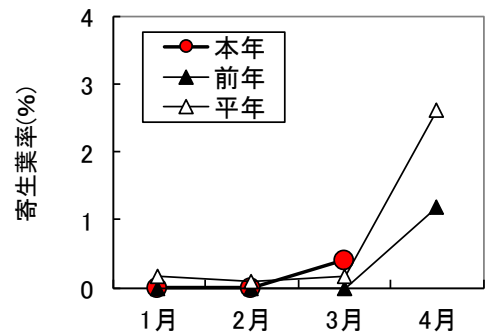
(3) 対策

ア これからの時期は、施設内での発生が増加するので、粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、早期防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

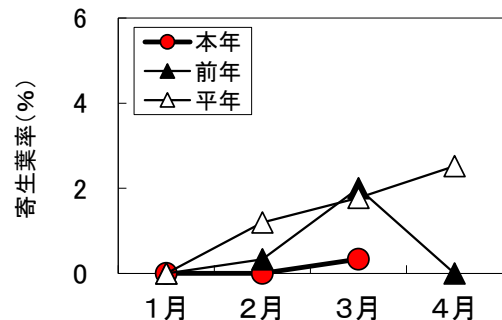
イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照)。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生葉率の推移 (冬春ナス)



アザミウマ類の寄生葉率の推移 (冬春キュウリ)

◎野菜全般

1) アブラムシ類

(1) 発生量：並

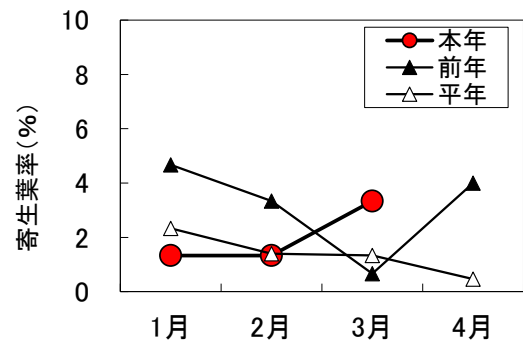
(2) 根拠

ア 3月の巡回調査では、トマトでは寄生葉は確認されず(寄生葉率平年0.1%)と平年並、ナスで寄生葉は確認されず(寄生葉率平年0.4%)と平年並、キュウリで寄生葉は確認されず(寄生葉率平年0.1%)平年並、イチゴで寄生葉率3.3% (平年1.3%)で平年比やや多の発生であった(±)。

(3) 対策

ア 気温の上昇に伴い、有翅虫の飛来が多くなるため、発生に注意し、早い時期からの防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アブラムシの寄生葉率の推移 (イチゴ本ぼ)



イネいもち病の防除対策について

いもち病は保菌種籾を第一次伝染源として苗で本田へと持ち込まれます。そのため、保菌種籾から苗への感染を防ぐことが重要です。

- (1) いもち病は種子伝染する。購入種子を使用する場合も塩水選と種子消毒を徹底する。
- (2) 登録農薬での浸漬処理では、薬液が行き渡るように網袋等に籾を入れ過ぎないようにする。また、薬液の温度は10℃以上とする。
- (3) 温湯消毒では、温度管理を適正に行う。
- (4) 種子消毒後の苗にいもち病菌を感染させないため、育苗床に被害わらや籾がらを持ち込まない。
- (5) 余り苗及び補植用苗は、伝染源となりやすいので、本ぼに長期間置かない。

スクミリングガイの防除対策について

本年は11月以降、例年より気温が高く推移しています。暖冬の場合、越冬したスクミリングガイの生存率が高くなるため、発生量が多くなることが懸念されます。水温が15℃を超えると活動を開始しますので、移植後はほ場をよく観察して、以下の防除対策を徹底しましょう。

- (1) 水路から水田への侵入を防ぐため、取水口および排水口は金網（4 mm以下）で覆う。さらに、排水口は、常に排水路の水面より高くなる場所に配置する。
- (2) 深水管理すると被害が大きくなるので、発生が多い水田では水深1 cm以下の浅水管理を行う。
- (3) 移植後に水田内の貝が多いときは捕獲する。特に、浸冠水後は貝が侵入しているので、見回り捕獲する。
- (4) 薬剤防除を行う際、薬剤には貝が摂食して殺貝効果が現れる剤（メタアルデヒド等）と食害防止する剤（カルタップ等）があり、食害防止効果を持つ剤の使用後に、食毒による効果のある剤を使用すると効果が発揮できないので併用はしない。
- (5) 特殊肥料として販売されている椿油粕は、農薬として登録されていないため、スクミリングガイなど農作物の害虫の駆除目的で使用しない。

果樹カメムシ類の発生について

本年は、チャバネアオカメムシの越冬量が多かった（令和6年2月22日付け技術情報第11号 <https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/241118.pdf> を参照）。加えて、気象予報では今後1ヶ月の気温が平年より高く推移する予測であることから、例年より早くカメムシ類の活動が始まると予想されます。

熊本県では、果樹を加害するチャバネアオカメムシとツヤアオカメムシの予察灯及びフェロモントラップ調査を4月から開始し、各誘殺状況を病虫害防除所ホームページ

(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>) に掲載し、随時更新しますので、これを参考にほ場を見回り、早期発見、早期防除に努める。



イチゴ親株におけるハダニ類の防除対策

～次作での発生リスク低減に向けて～

気温の上昇とともに、ハダニ類の発生も増加傾向にあります。次作で多発させないためには、親株に持ち込まないことが重要となるため、以下の対策を徹底しましょう。

- (1) 本ぼからの持ち込みを防ぐため、親株ほの管理作業は最初に行う。
- (2) 本ぼで除去した老化葉や収穫終了後の株をほ場周辺に放置しない。
- (3) ほ場周辺の雑草は発生源となるので、除草を徹底する。
- (4) 薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行い、十分な液量で薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。
- (5) 育苗期は気門封鎖剤などの物理的資材を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が低いため、7日程度の間隔で複数回散布する。

施設野菜における地上部病害対策

2月以降、降雨や曇天傾向が続いているため、施設野菜において、菌核病、べと病、灰色かび病などの地上部病害が増加傾向にあります。九州北部地方の1ヶ月予報では引き続き降水量は多い予想であり、さらなる発生拡大が懸念されるため、以下の対策を行いましょう。

- (1) 過繁茂を避け、通風採光を良くする。日中は換気を図り、多湿を避ける。
- (2) 病害が多発してからの防除は困難となるため、天気予報に留意し予防防除を重点に行う。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- (3) 発病葉、発病果や被害残さは伝染源となるので、早期に除去し、ほ場外に持ち出し処分する。また、薬害や生理障害により枯死した葉も伝染源となる恐れがあるため適正に処分する。



野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらの微小害虫は、気温が高くなると活動が活発になるため、今後、ウイルスを持った虫（保毒虫）が施設外に拡散することによってウイルス病の発生が増加することが懸念されます。

そこで、確実にウイルスの伝染環（つながり）を絶ち、地域におけるウイルス病の拡大を防ぐため、以下の2つの対策を必ず行いましょう。

1 保毒虫を「増やさない」対策

施設内で微小害虫を増やさないようにし、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- (1) 発病株は重要な伝染源となるので、適正に処分する。
- (2) ハウス内に粘着トラップを設置し、害虫の密度を低下させる。
- (3) コナジラミ類の発生がみられるほ場では、継続した防除を行う。
- (4) トマト黄化葉巻病抵抗性品種であっても、トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）に感染し伝染源となるため、コナジラミ類の防除を継続して行う。
- (5) ウリ類の連続栽培を行う場合は、保毒虫を次作に持ち越さないように防除を行う。

2 保毒虫を施設外に「出さない」対策

地域（野外）の保毒虫密度を高めないために、ハウス内から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

- (1) 栽培中の「出さない」対策
 - ア 定期的に施設周辺を見回り、ハウスビニルや防虫ネットに破れが無い点検し、必要に応じて修繕を行う。
 - イ 成虫に効果の高い剤を主体とした薬剤防除を行う。
- (2) 栽培終了後の「出さない」対策
 - ア 微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。
 - イ 悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤^{注1}の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。
 - ウ 地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫及びウイルスを完全に死滅させる。
 - エ 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。

注1) 令和6年3月27日現在において使用可能な薬剤は以下のとおり

- ・カーバムナトリウム塩液剤（商品名：キルパー）
- ・クロルピクリンくん蒸剤（商品名：クロピクフロー）

※クロルピクリンくん蒸剤のうち使用できるのはフロー剤のみ



本予報は、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項等
		平年比	
カンキツ	そうか病	やや多	巡回調査では平年比やや多（＋）。 防除員報告では平年並～少（±）。 開花期に春葉での発生が認められる場合は、灰色かび病との同時防除を行う。 越冬病斑は伝染源となるため、できるだけ処分する。
	かいよう病	やや多	巡回調査では平年比やや多（＋）。 防除員報告では平年並（±）。 果実への感染を防止するため、春葉の防除を行う。
ナシ	赤星病	並	前年の巡回調査では平年並（±）。 黒星病との同時防除を行う。
冬春トマト	葉かび病	並	巡回調査は、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年比やや多～やや少（±）。 発病葉は伝染源となるので、早めに除去する。発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。
	すすかび病	並	巡回調査は、平年並（±）。 防除員報告は、平年並（±）。 発病葉は伝染源となるので、早めに除去する。発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。
冬春ナス	うどんこ病	並	巡回調査は、平年比やや少（－）。 防除員報告は、平年比やや多～並（±）。 発病葉は伝染源となるので、早めに除去する。発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。
キュウリ	うどんこ病	並	巡回調査は、平年並（±）。 防除員報告は、平年比やや少（－）。 多発後は防除が困難なので、発生初期の防除を徹底する。
メロン	べと病	並	防除員報告は、平年並～やや少（±）。 肥料切れで多発するので、適正な肥培管理を行う。
ウリ科野菜	つる枯病	並	防除員報告は、メロンで平年比やや多～並、スイカで平年並（±）。 かん水は直接株元に行わず、株元周辺を出来るだけ乾燥状態に保つ。
ばれいしょ	疫病	並	防除員報告は、平年並（±）。 九州北部地方1か月予報では、気温高、降水多（＋）。 平均気温が15～16℃以上で降雨が続くと発生しやすいため、天候を確認しながら予防散布に努める。

【野菜病害虫の共通対策事項】

- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める（病害）。
- ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

トマトキバガの防除薬剤について

トマトキバガについては、令和3年に国内で初めて発生が確認され、本種に対する適用農薬がなかったことから、植物防疫法第29条第1項の規定に基づき、県内で被害が想定されるトマト、ミニトマトに使用できる農薬の一覧を病虫害発生予察情報（特殊報）や病虫害防除所のホームページに掲載した経緯があります。

今般、令和5年11月28日付け消費・安全局植物防疫課長通知により、同規定による防除は終了し、トマトキバガ対象の防除に適用がない農薬を使用できなくなりましたので、ご注意ください。

また、本虫は侵入警戒有害動植物（植物防疫法第16条に規定される通報義務の対象）であることから、農作物の栽培等において発生が見られた際には病虫害防除所までご連絡ください。

<侵入病虫害を発見したらお知らせください（熊本県）>

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/173364.html>

- ◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室) (TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。

